東京外国語大学国際日本研究センター主催夏季セミナー＆サマースクール2014
2014年7月29日（火）-8月1日（金）10:00-17:30

＜プログラムと概要＞

【7月29日（火）】 102室 （14:20-以降:105室）	
10:10 – 11:40	**【ガイダンス】　友常勉（東京外国語大学）** 夏季セミナー、サマースクールを通しての目標と修得すべきスキルなどを説明する。また、ジャーナルの投稿を視野に入れた論文の書き方、参考文献のまとめ方などもレクチャーする。
12:40 – 14:10	**【ワークショップ】「詫び」と「感謝」の諸相　谷口龍子（東京外国語大学）** 自分の行為を相手に詫びたり、相手の行為に感謝を示す言語行為は、多くの言語の日常生活で頻繁に行われ、人文科学、社会科学の諸分野において研究対象とされています。「詫び」や「感謝」が、語用論、談話分析や関連分野においてどのように研究されているのか概観した上で、日本語や中国語などについて映画やテレビドラマでの発話データと分析結果を紹介します。言語による異同や言語教育への応用についても参加された方々と討論できればと思っています。
14:20 – 15:50	**【公開ゼミ】大学院言語文化専攻　日本語文学文化研究　村尾誠一（東京外国語大学）** 共通テーマである『新古今和歌集』所収歌に関する受講学生の発表とそれに基づく討論を公開の形で行います。 今回はチョヒジンさん（博士後期課程所属）にレポーターをつとめてもらいます。 『新古今和歌集』の賀歌「君が代は千代ともさざしあまのとや出づる月日の限りなければ 藤原俊成」を発端に、この歌の解釈とともに、「君」という歌語を韓国・中国の詩歌との対比の中で分析する発表となる予定です。 是非討論に積極的に参加して下さい。
16:00 – 17:30	**【公開ゼミ】大学院地域・国際専攻日本歴史文化論　野本京子（東京外国語大学）** 大学院地域・国際専攻の日本歴史文化論のゼミを公開で行います。ゼミの院生（博士後期課程を含む）による各自の研究テーマと概要の報告後、当日、参加した方々にも加わっていただき、研究テーマの設定や方法論などについて話し合います。積極的に議論に加わっていただき、出席者間の交流を深めたいと思います。

【7月30日（水）】 102 室 / 103 室

		102 室		103 室
10:10 – 11:40	司会（鈴木智美）	**「日本語における使役文と受身文の似通い」　早津恵美子（東京外国語大学）** 使役文と受身文とは典型的には異なる事態を表現するタイプの文である。したがって、ふつう使役動詞（「V-(サ)セル」）と受身動詞（「V-(ラ)レル」）を入れかえることはできない、あるいは入れかえると別の事態を表現してしまう（「親が子供に食器を洗わせる（vs.洗われる）」「花子が先生にほめられる（vs.先生をほめさせる）」）。しかし、ある条件のもとでは使役動詞による表現と受身動詞による表現とが、微妙なニュアンスの違いはあるものの、同じ一つの事態を指しうる場合がある（「似通い」）。「このことは誰にも｛気づかせては：気づかれては｝ならなかった｝」「戦争で｛子供を死なせる：子供に死なれる｝」等。この現象について主として使役文の側から(1) 使役文と受身文のどのような性質が両者の似通いを支えているのか(2) どのような条件のもとで似通いが生じるのか(3) 似通うとしても両者にはどのような違いがあるか、について考える。	司会（村尾誠一）	**「日本古代文学における「カラクニ」考察 － 韓国から唐国へ 」　金鍾德（韓国外国語大学校）** 日本の古代文化は中国源泉の文化が朝鮮半島経由で日本へと東流されたものが多い。そこで日本の古代文学には朝鮮半島の文化があらゆる形で影を落としている。『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』には、韓、加羅、韓国、高麗、百済、新羅など、文化の東流にともなう朝鮮半島の国名が散見される。これらの国名には韓国では散逸してしまった文化も化石のようにこびり付いている。また文化交流や戦争、外交関係などが投影されているので、古代日本の朝鮮半島に対する認識がよく表れている。ところが、平安時代になると途端に朝鮮半島の国名は急に少なくなり、『源氏物語』などで「韓国」はほとんど「唐国」に代わっている。そこで今回の報告では、これらの国名を中心に日本と朝鮮半島の文化交流、渡来人の役割などを調べてみたい。特に古代から平安時代までの文献に表れた朝鮮半島のイメージや認識の変化を考察する。そして古代の日本にとって韓国はどんな国であったかを究明し、日韓の文化交流の源泉に迫ってみたい。
12:40 – 14:10	（鈴木美加）	**「日－タイ通訳技能向上のためのタスク遂行型学習―ビデオプロジェクトを中心に―」** **タサニー・メーターピスィット（タマサート大学）** タイのタマサート大学日本語プログラムでは、2003年より学部4年次科目として、日本語とタイ語の通訳入門の科目が導入され、現在「通訳入門クラス」として「将来の職場に応用できるよう通訳のテクニックを身につけること」を目的とした授業を行っている。授業では、タイ語－日本語の逐次通訳と、日本語－タイ語の同時通訳の活動タスクに加え、言語的知識及び技能の向上を図るタスクも行っている。本発表は、「通訳入門クラス」で言語的知識及び通訳の技能の向上を目標として試みた、グループワーク「タイ文化紹介の日本語ビデオ作成」および、個人タスク「デジタル教材のタイ語吹替版作成」の実施方法、内容、結果、評価について述べる。また、実施上の問題点や今後の課題についても考察を行う。	（谷口龍子）	**「近現代文学研究の可能性――芥川龍之介の場合――」　范淑文（国立台湾大学）** 近現代文学研究に言及する際、実証法や作家論などが最も古い方法であろう。その後は作品論、テクスト論、物語論、記号論など、様々な研究方法がすすめられてきた。グローバル化に伴い、文学の研究方法にも時代の潮流に応じるように変化が見られてきた。一言でいえば、一つのジャンルにこだわらず、学際的な研究が一つの流行とも言えよう。古い題材でも、心理学や海外の視点による研究、または作品の中にある海外的要素など、違った方向から問題点を見詰め直すと異なった捉え方や結論が浮かび上がることが可能になるのである。今回は日本近現代文学の中で最もよく知られている作家の一人である芥川龍之介を実例としてその研究方法の可能性を考えてみる。

	102 室		103 室		104 室		105 室	
14:20 | 14:50	1（鈴木智美）	**モンコンチャイ・アッカラッチャイ（東京外大）** 名詞句の前に位置する場合のタイ語限定表現khɛ̂ɛとphiaŋの意味的特徴に関する考察―日本語との対照を目指して―	3（坂本惠）	**臼井 直也（東京外大）** 日本のアニメーションは海外でどのように日本語学習に用いられてきたのか―元学習者へのインタビューからみる1980年代、1990年代のアニメーションを用いた日本語学習の実態―	5（前田達朗）	**イザベル・ファスベンダー（東京外大）** 現代日本社会における若者の性意識とジェンダー規範 ~ 避妊行動にみる男女間の非対称性 ~	7（友常勉）	**藤井嘉章（東京外大）** 『古今集遠鏡』と宣長の歌論
14:50 | 15:20		**カーヴェ・マグスディ（東京外大 ）** 日本語とペルシア語における動詞の自他交替の対照		**王書琪（東京外大）** 聴解ストラテジーに対する意識調査―台湾人日本語学習者を対象として―		**ノルマリス・アムザ（シンガポール大）** Representation of Environmental Aspects in Japanese Companies' Green Advertisements		**李筱喜（韓国外大）** 雨夜の品定の予言的機能 －高麗人予言との比較を中心に－
15:20 | 15:50		**藍迪之（北京外大）** 中日感嘆文のマーカーに関する一考察		**張学博（東京外大）** 日本語における空間表現と事態把握－中国語・英語の誤用コーパスからみた日本語の特性－		**鄭盛昶（韓国中央大）** 海外映画タイトルの韓・日比較 －タイトルの構成を中心に－		**余祎廷（厦門大）** 竹内好の翻訳理論についての考察
16:00 | 16:30	2（望月圭子）	**張舒鵬（東京外大）** 感情・評価表現をめぐる日中両言語の形容詞・動詞の一考察	4（鈴木美加）	**ナンティポーン・チャンチャルーン（タマサート大）** タイ人日本語学習者における接続表現としての「て形」の理解と運用能力	6（河路由佳）	**秦石美（北京外大）** コーパスに基づく戦後日本首相の国会演説に関する研究	8（橋本雄一）	**ナザランカ・カチャリーナ（東京外大）** レフ・トルストイと日本の文学者
16:30 | 17:00		**張正 （東京外大）** 複合動詞「～あげる/あがる」と中国語補語<-上>の意味拡張に見る日本語と中国語の空間認知の相違		**斎藤奈菜子（東京外大）** 日本語学習者のスピーチレベルに関する考察 －スピーチレベル設定に資する効果的な教材の作成に向けて－		**虞瀬龍（学芸大）** 多文化共生主義と昨今の排外主義の台頭考察－昨今のヘイトスピーチを中心に－		**平原真紀（東京外大）** 近世日本の読本と中国の白話小説―「椿説弓張月」における《楊家将演義》受容の可能性―
17:00 | 17:30		**陳祥（台湾政治大）** コーパスに基づく日本語反復形容詞の研究		**金智善 （韓国外大）** 韓国人日本語学習者における無声破擦音 「つ」の発音に関する一考察		**劉品宣（台湾大）** 前期蘇峰と兆民における自由民権論―『将来之日本』と『三酔人経綸問答』を中心に―		**王薇婷（台湾大）** 「好色一代女」における嫉妬の意味

【7月31日（木）】 102 室 / 103 室

		102 室		103 室
10:10 – 11:40	司会（三宅登之）	**「スペイン語と日本語の『属性叙述受動文』について」　高垣敏博（東京外国語大学）** 日本語のニ格動作主をとる受影受動文（昇格受動文）は他者から事象を通じて何らかの影響（受影性）を受ける有情主語を典型とする受動文である。ところが、非情名詞を主語とするいわゆる「属性叙述受動文」（この雑誌は10代の若者によく読まれている）では受影性が関与しなくてもニ格動作主をとり、受動文が成立する。一方、スペイン語にも英語の受動文に似た <ser + 過去分詞 + por動作主> がある。この受動文は動詞の語彙アスペクトにより厳しく制限されており、一般に限界性（完了性）をもつ動詞でなければ受動化が許容されない。ところが、動作主が総称性（あるいは複数性）を帯びると受動化が可能になる。これを一種の「属性叙述受動文」と考えることにする。セミナーでは、両言語の受動文を概観し、どうして、属性叙述のレベルになると、制限されている受動化が可能になるのか考えてみたい。	司会（山口裕之）	**「知的共同体のなかの結婚と恋・愛――夏目漱石『虞美人草』の比較研究」 蕭幸君（台湾・東海大学）** 二葉亭の『浮雲』において、立身出世とともに見出された結婚、恋愛の命題が、その後の多くの作品にも採りあげられている。そこに描かれている結婚、恋愛のあり方の多くは、明らかに当時の知的な共同体のなかで形成された行為であると思われる。これらの作品のなかでも、とりわけ漱石の『虞美人草』は実に多くの徴候を提供してくれる。本発表は、作品のなかにおける〈結婚〉〈恋・愛〉の捉え方が、一種の知的バロメーターのような働きを持つと仮定し、谷崎潤一郎の『痴人の愛』、台湾植民地時代の作家張文環の『山茶花』などに言及しつつ、比較検証を行う。
12:40 – 14:10	（望月圭子）	**「中日翻訳における言語の問題と文化の問題」　徐一平（北京外国語大学）** 異文化間の交流は翻訳から始まる。翻訳は異文化をつなぐ黄金の鎖とさえ言われている。外国語教育の中では、翻訳も重要な手段だと教えられている。 しかし、翻訳においては、言語の問題と文化の問題が共存している。翻訳に即してい考える場合、言語は基本的には翻訳可能であるが、文化は基本的には翻訳不可能になっている。そのような問題と関連して、川端康成の『雪国』という実際の翻訳作品の冒頭部分を例にとりながら、この問題を説明する予定である。	（友常勉）	**「観世小次郎信光とその能作品」　林明珠（シンガポール国立大学）** Kanze Nobumitsu (1435-1516) is one of the most important noh practitioners in the history of noh. Other than the many noh plays that he has composed, he was also instrumental in leading the Kanze troupe through a dire period of leadership and economic crisis. He was also believed to be the first to use varied technique in the composition of noh plays.

	106 室（※前日102→106へ変更です）		103 室		104 室		105 室	
14:20 | 14:50	9（降幡正志）	**トゥザ・ライン（東京外大）** 日本語とビルマ語の主語を表す助詞について	11（伊集院郁子）	**ツォイ・エカテリーナ（東京外大）** 三者間の共同作業における相互行為―親疎関係並びに性別による配慮行動の異同―	13（岡田昭人）	**鈴木祐己（東京外大）** 日本語教育と文学教育の連携―俳句を用いた授業の実践報告から―	15（野本京子）	**黄楚群（東京外大）** 戦前日本における農業団体の米価調節論――1930年代の議論を中心に
14:50 | 15:20		**川村 駿 （東京外大）** 「NP1のNP2」の用法：'NP2 of NP1' の誤用と英語名詞句との対照的視点から		**大西秀幸（東京外大）** 日本語とビルマ語の言いさし文に関する対照研究		**村上昂音（東京外大）** PISAから日本の基礎教育を考え直す～上海市の教育システムと比較して		**内川隆文（東京外大）** 戦前日本における電力国家管理と「経済の社会化」―永井柳太郎の思想を中心に―
15:20 | 15:50		**徐園園（北京大）** 『ケド』と『ノニ』：文末用法に関する分析		**孫恩琦（筑波大）** 発話行為理論から見た文末の接続表現の用法―カラ・ケド・シを中心に―		**劉妍（東京外大）** 自立を育てる教育実践の意味に関する一考察		**那須理香（国際基督教大）** 1893年シカゴ万国宗教会議とアメリカ社会－アメリカ仏教伝播の観点から－
16:00 | 16:30	10（成田節）	**荒川和仁 （東京外大）** 日本語と英語の時制：学習者の誤用にみられる時制・アスペクトスキーマ	12（谷口龍子）	**宋甜甜（学芸大）** 日中両言語における再依頼に対する断り表現	14（宮城徹）	**辻好文（東京外大）** EPA外国人看護師の看護師国家試験結果を踏まえて、教育ルート開拓の提言	16（山口裕之）	**倪逸舟（東京外大）** 村上春樹文学試訳――「女のいない男たち」を通して
16:30 | 17:00		**Halnazarov Maamoorjon（東京外大）** 日本語とウズベク語の愛称形成について		**郭海庁 （北京大）** 対訳からみる事態把握における中日の差異		**スィリクワン・サグァンポン（タマサート大）** タイの国際病院における医療通訳者（日―タイ）の現状と研修の必要性		**盧柏丞（台湾東海大）** 坂口安吾のアイデンティティ政治研究
17:00 | 17:30				**ウマロヴァ・ムノジャット（筑波大）** 「依頼」会話に見られる談話展開のパターン―ウズベク人と日本人の接触場面の考察―		**王素蘭 （開南大）** 台湾における日本研究―台湾国科会の全資料をもとに―		**李宣潔（台湾政治大）** 日清修好条規の検討 －中国の視点より
17:45 | 19:45	院生懇親会@円形食堂（ 参加費　学生：1000円　教職員：3000円）							

【8月1日（金）】 102 室 / 103 室

		102 室		103 室
10:10 – 11:40	司会（前田達朗）	**「日本社会言語学との出会い，そしてその後の道程」　任榮哲（韓国・中央大学校）** 本稿では，第一に，韓国における日本語教育の歴史や日本語の位置づけ，そして日本の社会言語学との出会いについて回顧する．第二に，今まで行われてきた在日韓国・朝鮮人や在米韓国人の言語生活に関する研究成果の一端を紹介する．第三に，韓国人と日本人のコミュニケーション・スタイルについてあいづちの頻度や個人テリトリー意識，さらには韓・日・中３国の依頼過程における不満表明の解明についてムーブという観点から考察する．第四に，韓国の社会言語学の動向について，日本のそれと比較しながら，韓日の社会言語学がこれまでにどの分野でどう研究されてきたか，そして今後の展開としてどのような方向へと向かえば良いかについて分析する．最後に，現在の韓国の日本語教育界において焦眉の関心事である日本語教育の現状について述べることにする．	司会（岡田昭人）	**「"社会教育"はSozialpādagogikかそれともAdult Educationか」　谷和明（東京外国語大学）** 学校外で行われる主に成人や低学歴青年層を対象とする教育の領域は欧米では、19世紀には民衆教育、労働者教育として発展したが、20世紀には「成人教育」（Adult Education）と総称されるようになり、現在に至っている。他方日本では、1880年代以降「通俗教育」と称されていたのが、1920年代からは「社会教育」と呼ばれるようになり、戦後は「社会教育法」によって制度化されてきた。このような対応関係に基づき、「社会教育」はAdult Educationであり、Social Educationと訳すべきでないという理解が一般化してきた。ところが近年、「社会教育」と欧米のAdult Educationは必ずしも同一ではなく、むしろドイツを中心に発展してきたSozialpādagogik（英：Social Pedagogy）と訳すべきという主張が登場するようになった。この「社会教育」の適切な訳語をめぐる問題を、「社会」＋「教育」という造語が行われた近代日本社会のコンテキストを参照しつつ、社会的実践を表現する概念の翻訳可能性という視点から考察してみたい。
12:40 – 14:10	（坂本惠）	**「語用論と異文化コミュニケーション」　趙華敏（北京大学）** 語用論は社会の風俗、価値観や文化の規約などによる適切な言語使用を研究する学問であり、異文化コミュニケーションは20世紀60年代にアメリカから源を発した人類学・社会学・翻訳学・語用論などと関係のある学際的な研究である。語用論と異文化コミュニケーションの研究は国や言葉の違う話者がコミュニケーションをするときに生じる違和感を説明するのに大いに役立つ研究分野だと思われる。本講義はこの角度から、中日のコミュニケーションの相違を分析し、そこから生まれる誤解や相互理解の齟齬を少しでも解明できるのに資するように期待する。	（野本京子）	**「台湾人から見た日本首相の靖国神社参拝問題」　于乃明（台湾・国立政治大学）** 1980年代から、台湾の民主化が進み、歴史問題への見方が多岐に分かれた。靖国神社問題についてもそうである。例えば政治傾向の違いから、国民党と民進党の支持者は政治背景とイデオロギーが大きく分かれ、日本首相の靖国神社参拝への反応は正反対である。この他に、李登輝元総統と金素梅元議員は出身が本土か外省か（金元議員の母は原住民である）の違いから、意見も分かれた。特に外省の第一世代の多くは日本首相の靖国神社参拝には反対である。しかし、今どきの若者はどんな見方をしているのか、観察に値する。これらの現象は今日台湾社会の民主多元化を反映している。
14:30- 15:30				サマースクール　とりまとめ